

2014年度 No.1 2014年5月15日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局  
 〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 中央大学文学部 森茂岳雄研究室  
 TEL/FAX：042-674-3852 E-mail：jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp  
 Website：http://www.kokusairikai.com/ Facebook page：日本国際理解教育学会facebook

目次

会長挨拶  
 第24回研究大会のご案内  
 紀要編集委員会報告  
 国際委員会報告  
 研究・実践委員会報告  
 理事会・常任理事会報告

1 韓国国際理解教育学会参加報告 7  
 2 博学連携教員研修ワークショップ2004  
 4 in みんなくのご案内 9  
 4 新刊のご案内 9  
 5 事務局通信 9  
 7 事務局からの連絡とお願い 10

【会長挨拶】

グローバル人材の育成と国際理解教育

会長 藤原 孝章

昨今、「グローバル人材の育成」が叫ばれている。政府の「グローバル人材育成推進会議 審議まとめ」（2012.06.04、首相官邸政策会議）によると、ヒト、モノ、カネ、情報が国境を越え、それがもたらす全地球的な課題とその解決が不可欠な時代を「グローバル化」とし、「グローバル人材」を、Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーの3要素にわけて示している。しかしながら、3要素のうち「測定が比較的容易な要素Ⅰを基軸」とし、「グローバル人材の能力水準の目安」を、① 海外旅行会話、② 日常生活会話、③ 業務上の文書・会話、④ 二者間折衝・交渉、⑤ 多数者間折衝・交渉の5つのレベルの英会話能力にわけ、前半の①②③については裾野が拡大し着実に進捗しつつあるから、今後は、④⑤の人材育成が重要であるとしている。すなわち、当面の対策かはともかく、まずは「グローバル人材＝英語ができる人」になってしまった。本来だと個別企業の社員教育において獲得されるべき高度な英語コミュニケーション力を、大学や高等学校の教育に求めようとしている。

ところで、グローバル化のかけ声は、今に始まったことではない。実は、「国際化の時代」があった。それは、1987年臨教審最終答申における国際化、情報化などの「変化への対応」を反映したものである。答申をうけた1989年改訂の学習指導要領では、高等学校の教育の多様化をもたらす、国際科・コースや英語科・コースなどの専

門学科・コースが設置されていった。おりしも日本はバブル経済にあたっており、高等学校では語学研修やホームステイを活用した海外研修もふえていった。

本学会は、このような国際化の要請の中で文部省出身の天城勲（故人）を初代会長として1991年に設立された。当時の天城会長は、初等、中等教育において、教育の国際化を図るために必要な政策、制度、プログラムとして7点をあげていた。①帰国子女教育のための特別な教育体制、②国際化に対応した特色ある高等学校づくり、③教員の海外派遣研修、④コミュニケーション能力向上を図る外国語教育の充実、ネイティブ・スピーカーの招致や英語教員の海外研修、外国語科目の多様化、⑤留学制度や海外修学旅行、⑥外国の学校との姉妹校提携、⑦急増する在日外国人子弟の受入である。また、国際化教育に深くかかわる社会、地理歴史・公民、外国語等の教科だけではなく、教育の全課程での教育実践、知識のみならず技能、価値、意識、態度に関わる体験的学習の重要性を説いていた（『国際理解教育』創刊準備号、1993年1月、9-10頁より要約）。

昨今の「グローバル人材の育成」が、本学会が創設期にもっていた国際的な視野の獲得や国際貢献、相互依存の意識化や、グローバルな課題解決のために行動できる地球市民の育成でもなく、英語能力の向上と定着をはかるきわめて限定された人材観しか提示されていないのは残念という他ないし、逆に本学会に課せられた使命もまた大きいといえよう。

## 【日本国際理解教育学会 第24回研究大会(奈良大会)のご案内】

# 国立大学法人 奈良教育大学 第24回研究大会実行委員会

第24回研究大会実行委員長 加藤 久雄

本学会の「設立の趣旨」(1991年1月)の中に、「民族、伝統、文化、言語等の違いによる競争、対立、誤解、摩擦も日常化し、国民相互の理解交流の大切さを示している。さらに環境問題など地球規模の新しい課題が我々の視野を全人類と来たるべき世紀に向けさせている。人々の心に平和の砦を築くという精神の下に、ユネスコが永年唱えてきた平和と異文化理解を軸とする国際教育の必要性が今日ほど高まったときはない。」の文章があります。

学会設立から13年を迎える今、この文章の重みは、さらに増すばかりです。ユネスコが「国連持続可能な開発のための教育の10年 (UNDESD: The United Nations Decade of Education for Sustainable Development, 2005-2014)」を宣言して、ちょうど10年目を迎えます。11月には、岡山市で各種ステークホルダーの会合、愛知県・名古屋市で関係級会合及び全体の取りまとめ会合が、開かれます。まさに、本年は節目の年です。

奈良教育大学は、2007年に日本で最初に大学としてユネスコスクールに加盟しました。以後、2011年3月には、持続発展・文化遺産教育研究センターを設置し、2014年4月には、次世代教員養成センターの「ESD・課題探究部門」に改組、一貫してESDの研究と教育を推進して参りました。この間、ASPUUnivNet (ユネスコスクール支援大学間ネットワーク)の事務局をさせていただき、ユネスコスクール全国大会の会場校をさせていただいたり、また、自らがユネスコスクールとしてESDの実践に取り組んで参りました。ユネスコスクールの大学が、ESDを行いながら、ユネスコスクールを中心とした幼小中高でのESDを支援し、また、ESDの担い手となる教員を養成するというサイクリックな構造の中で、まさに学ぶ喜びに支えられた学び続ける人材の育成を目標に歩んで参りました。

国連ESDの10年の最終年に、これまでのESDの取り組みを振り返り、ESDの深化と理論化を目指すこと、そしてPost-DESDの方向性について指標を得ることを目的として、本学にて研究大会を開催できますことを、本学の学び喜びとし、学び続けたいと思います。

「持続可能な開発に関する世界首脳会議」(2002年 ヨハ

ネスブルグ・サミット)において日本が提唱した「国連ESDの10年」は、2005年に始まり2014年で(大会開催年)最終年を迎えます。日本国際理解教育学会においてもこれまでESDに関わる研究や教育実践が蓄積されてきていることに鑑み、本大会は今まで行われてきた、あるいは現在進められてきているESDの取り組みを総括するとともに、国際的なESDの動向も踏まえながら、2015年以降の方向性を協議することを第1の目的としています。加えて、本学会の特定課題研究から始まった「ことばと国際理解教育」に関わる研究・実践が、科研費助成プロジェクトへと発展し、今年がその最終年度となっています。これをふまえて、その成果を学会全体に共有・還元することを第2の目的に設定し、本大会を開催する。大会の日程は次の通りです。

### 【1日目：6月14日(土)】

- 9時00分～09時30分 受付 講義棟エントランス
- 9時30分～12時00分 自由研究発表(講義棟)
- 12時00分～13時00分 昼食(大学生協)
- 13時00分～14時00分 総会(大学講堂)
- 14時00分～17時00分 シンポジウム(大学講堂)
- 17時30分～20時00分 懇親会(大学生協)

### 【2日目：6月15日(日)】

- 9時00分～09時30分 受付 講義棟エントランス
- 9時30分～12時00分 自由研究発表(講義棟)
- 12時00分～13時00分 昼食(大学生協)
- 13時00分～16時00分 特定課題研究発表(講義棟)「国際理解教育における実践研究の視座」

本研究大会では二つのシンポジウムを開催します。その一つは「ESDと国際理解教育」をテーマとしたシンポジウムです。ユネスコは、国連の第57回総会において、国連ESDの10年の主導機関に指名されたが、1974年11月19日の第18回ユネスコ総会において採択された国際教育勧告において、①諸民族の権利の平等と民族自決権、②平和の維持、③人権の行使と遵守を確保する措置、④経済成長、社会開発及びこの両者の社会正義に対する関係、⑤天然資源の利用、管理及び保存、⑥人類の文化遺産の保存、⑦国際

連合組織の役割と活動方法の七つが国際理解教育の内容として取り上げられました。その後の1991年の国際教育指針、1994年の平和・人権・民主主義のための教育においても、これらの7項目は変わっておらず、ユネスコの国際理解教育は一貫してこの七つの項目を人類の主要問題として掲げ、その理解と問題解決のための態度や価値観の養成、さらにはスキルの向上を目的に取り組んできたことがわかります。

この流れが「国連ESDの10年」に引き継がれ、国内外でESDが推進され、今年がその最終年となる。本シンポジウムでは、3人のシンポジストをむかえ、これまでの国内外のESDを総括するとともに、ポスト2014年のESDの方向性を探りたいと考えます。

シンポジストには、国内のESD実践について詳しい、岡山市世界会議推進局長である浅井孝司氏を、またESDの世界の動向については聖心女子大学の永田佳之氏を、さらに世界遺産・文化遺産を通したESDの提唱者である福山市立大学の田淵五十生氏をお招きし、これまでのESD実践を踏まえつつ、今後のESDについてご意見をご発表いただきます。指定討論者には、気仙沼市においてESDを推進してこられた宮城教育大学の及川幸彦氏にお招きし、シンポジストの意見だけでなく、フロアの意見を引き出しながら、ESDで育成したい価値観、学習方法や内容、また評価や行動化について共通理解を深めつつ、ポスト2014において、ESDに関して研究・実践すべき方向性を考える機会としたいと考えます。

国内外のことばを取り巻く様々な問題が顕在化する中、本学会では特定課題研究の一つとして2008年から2010年にかけて「ことばと国際理解教育」研究プロジェクトが立てられました。その成果（『国際理解教育』Vol.16特集論文）は、科研費の助成を受けた「多言語・多文化教材の開発による学校と地域の連携構築に向けた総合的研究（代表：山西優二，課題番号：23330245）」に引き継がれ、最終年度である昨年末には「多言語・多文化教材の探求」と題するシンポジウム（2013年12月26日、早稲田大学）が行われました。

当該特定課題研究が開始されるまで国際理解教育の分野では、言語教育、特に英語教育は国際理解教育の内容を扱うための単なる道具の教育と捉えられることが一般的でしたが、プロジェクトチームは国際理解教育の「対象として

の言語」の側面にも注目し、国際理解教育においてあるべき「ことばの教育」を提案しました。また、単なる言語教育への提言にとどまらず、プロジェクト後半では具体的な教材の開発が行われ、学校教育や地域教育の現場での実践が可能な段階に至っています。

本大会のシンポジウム2では、「ことばと国際理解教育」プロジェクトのこれまでの成果を共有すると共に、現在ことばを巡って新たに生じている諸問題、例えば「グローバル人材」育成と言語教育との関係性や小学校教育課程における外国語教育の問題を取り上げながら、これからの「ことばの教育」の在り方について国際理解教育と絡めながら議論を行いたいと考えます。

シンポジストとして、山西優二氏（早稲田大学）、古石篤子氏（慶應義塾大学）、アルギロ・ムチドウ氏（ギリシャリストテレス大学）の3名を国内外からお招きします。ことばと国際理解教育プロジェクトチームのリーダーである山西氏にはプロジェクトのこれまでの流れと成果について、古石氏には欧州の言語教育政策や実践をふまえた日本における言語教育の在り方について、そしてムチドウ氏にはヨーロッパ特にギリシャにおいて彼女がこれまで関与されてきた教員研修を含む多言語活動実践とその背景についてそれぞれお話しいただく予定です。

元来ことばの教育には、言語習得だけでなく、言語（能力）と文化（能力）との関係、危機言語、言語的少数派のいわゆる言語権など、国際理解教育で扱われるべき多様な問題が含まれています。指定討論者の横田和子氏（目白大学）からは、プロジェクトチームのメンバーとしてことばの教育における新たな視点から問いかけをしていただくが、フロアからも、日本語教育、国語教育、外国語教育の言語教育の分野はもちろん異文化間教育や異文化間コミュニケーションあるいは学校教育や地域教育の教員・指導者養成などの多様な分野・立場からの質問や意見を期待したいと思います。

シンポジウムの他、国内外から50本もの自由研究発表、「国際理解教育における実践研究の視座」をテーマとした特定課題研究など、奈良の地での「充実した学びの2日間」を開催します。多くの国際理解教育の実践者、研究者の参加を期待しています。

## 紀要編集委員会報告

帝京大学 中山 京子

紀要20号の編集作業が進んでおります。特定課題研究をのぞき、17本の投稿があり、査読の結果、一般研究論文1本、実践研修論文2本、実践研究ノート2本が掲載となりました。また20号を記念して、「日本国際理解教育学会紀要論文題目にみる国際理解教育の動向—第1号から第20号の歩み—」を掲載いたします。

特集「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」の論文は、編集委員会において一般の投稿と同様に3人の査読者によって査読されました。これまで経験的に行われてきた海外研修とスタディツアーを国際理解教育の視点から論考し、今後の外国における研修の在り方に役立つ視点が示されました。従来のプロジェクト方式の特定課題研究の設定が終わり、今後の特集の在り方については、常任理事会、理事会、編集委員会において多くの議論がありました。21号からは、編集委員会、研究・実践委員会、国際委員会の各委員会企画による特集テーマが設定され、それぞれの委員会による特色ある論考が展開されます。21号は、編集委員会による特集「教師教育と国際理解教育」が組まれます。

### \*\*\*21号特集「教師教育と国際理解教育」の主旨\*\*\*

これまで、本学会において、学校教育・社会教育における国際理解教育については、多くの実践や研究が蓄積されてきた。しかしながら、国際理解教育を担う教員養成や教師の資質・能力の向上については、その重要性は指摘されながらも真正面からの研究がほとんどなされてこなかったのが現状である。一方で、国際理解教育を推進する現職教員や教職履修学生の育成のために、大学・大学院、行政、社会教育機関、NPO組織、地域活動団体など様々な場所での教師教育の取り組みが行われ、各々の経験的な積み重ねによる手法が開発されてきているが、これらについて論じられることは少ない。また、グローバル人材の育成が政策として掲げられているが、その内実や人材育成に関わる教師の教育について、国際理解教育の観点から十分に検討されてはいない。

そこで、本特集「教師教育と国際理解教育」では、様々な取り組みの成果と課題を明らかにし、国際理解教育推進のための教師教育について多様な視点から考究することを目的とする。

### 『国際理解教育』vol.21 論文募集のお知らせ

紀要20号、もしくはHP（大会前後に更新予定）掲載の「編集規定」及び「投稿規定」に即し、『国際理解教育』21号に掲載する一般および特集論文・研究ノートを募集します。投稿規定を確認の上、9月30日の投稿期限までに編集委員会事務局（投稿規定参照）へ投稿ください。多くの会員の皆様からの投稿をお待ちしております。

## 国際委員会報告

聖心女子大学 永田 佳之

前号にお知らせした通り、国際委員会ではいくつかの新たな目標を設定し、新規プロジェクトやイベントに取り組んでいます。重要な活動の柱は「海外スタディツアー」と「国際的な情報の収集と発信」ですが、以下にこれまでに実施された関連の活動をご報告します。

### (1) 海外スタディツアーの開催

近年、新たな時代の諸問題を解決に導く鍵として捉えられているキーワードの「レジリエンス」というテーマを掲げた海外ツアー（「レジリエンス〈しなやかな強さ〉を学ぶスリランカESDスタディツアー」）を8月にスリランカで実施しました。ツアー名と同じタイトルの報告書も刊行され、学会のホームページでもご覧いただけます。

<http://www.kokusairikai.com/pdf/esd20130804.pdf>

### (2) 海外ゲストによる講演会「中国における国際理解教育の現状と課題」の後援

2013年12月21日、北京師範大学国際・比較教育研究院副教授の姜英敏先生をお招きし、本学大学院人間科学専攻（教育研究領域）主催・日本国際理解教育学会後援による講演会が聖心女子大学で開かれました。母語のほかに韓国語や日本語にも通じておられる姜先生は、東アジアにおける新しい多文化共生のための教育開発に尽力されており、今回も「中国における国際理解教育の現状と課題 —『異己』との共生』を目指した教育実践を事例に」というテーマのもとに、中国の最新情報について語って下さりました。

### (3) ESD公開学習会の開催

2013年10月5日の午後、「ESD公開学習会」の一環として「日本のESDを捉え直す～国際的な潮流から見た実践・研究・政策課題～」を開催しました。ESDについての最新情報をお伝えすると同時に、日本のESDの政策および実践課題を共有しました。「ESDの10年」の最終年を目前にした時期であったためか、九州から北海道まで100名ほどの方々が聖心女子大学に集い、学習会後に開催された懇親会でもESDについて熱心に語り合いました。

### (4) 韓国国際理解教育学会への参加（荒川裕紀会員による参加報告参照）

### (5) 日中共同授業プロジェクトの検討

中国とのパイプを大切に育むという方針のもとに、「異己」という概念を基軸に据えた日中共同授業プロジェクトに両国の学校の協力を得ながら進めていくことになりました。詳細は、これから詰めていく段階にありますが、日中関係が必ずしも好ましい状況にあるとは言い難い昨今であるからこそ、教育を通じた両国の平和の礎を築く一助になればと願いつつ、事業の基盤を形成している最中です。

## 【研究・実践委員会報告】

## 2013年度 第1回公開研究会（愛知）報告

梶山女学園大学 宇土 泰寛

新体制の下、研究委員会と実践委員会が統合され、新しくできた研究・実践委員会においても、従来の実践委員会が継続してきたように、国際理解教育の普及を目指した活動として、9月28日（土）に、第1回公開研究会を愛知県名古屋市にある梶山女学園大学附属小学校（校長宇土泰寛）で開催しました。

梶山女学園大学附属小学校は、昨年60周年を迎え、東海地方で100年を超える女子の総合学園「梶山女学園」の一角を占めている学校であり、名古屋市閑静な住宅街にあります。東山動物園と連携した絶滅危惧種の名古屋メダカの飼育などの環境教育と同時に、国際理解教育にも力を入れており、小学校1年生から毎日少人数で英語活動を実施したり、オーストラリア・パースの小学校とホームステイの交流を実施したりしています。そして、机といすの支援交流から、西アフリカのブルキナファソの小学校とも交流するなど大陸を越えた国際交流や地球的課題としての水問題などにも取り組んだりしており、ユネスコスクールにも認定されている学校です。

当日は、午前中に公開授業を行い、午後に公開研究会を開催しました。

**公開授業**

3校時（10時45分～11時30分）その後、全員合唱

午前中の公開授業は、一般の保護者の方や愛知県の先生方も参加され、たくさんの方々が授業をご覧になりました。梶山小学校の全教員が、共通テーマ「水と生活」を社会や理科だけではなく、国語、算数、音楽、体育、総合、英語など多様な教科や領域から取り組み、それぞれ詳細な指導案を作成し、授業に臨みました。

中でも、3年B組総合科「どのような時に水を使っているのか考えよう」、5年A組社会科「自然災害に備える」、6年B組総合英語「多様な水の捉え方～台所から世界へ」の授業を中心に、午後の協議会で検討することにしました。

3年B組の実践は、世界遺産に登録された富士山の山ろく忍野八海の湧水にまつわる素材から授業を展開しました。5年A組の実践は、防災・減災への様々な取り組みについて調べることにより、自然災害大国の日本において、自分のできることを考えるというねらいをめざして、毎年夏休みに行く三重県浜島の事例や伊勢湾台風の経験を持つ名古屋市の事例をあげながら授業を展開しました。6年B組の実践は、インフラが進み清潔な水が各家庭に供給されている先進国でも、水の使い方の意識に違いがみられることから、実際にイギリス、オーストラリア、カナダ出身の先生にインタビューを行い、それをもとに授業を展開しました。

この公開授業の最後に、新校舎のトップライトから光が注ぐ吹き抜けの空間を使って、全員合唱が行われ、「Sound of Music」の英語での歌声とNHK全国学校音楽コンクールの課題曲「ふるさと」の歌声は、参観者を感動の渦に巻き込

みました。

**公開研究会** 午後1時～午後4時30分

場所 1階フレンドシップホール

東海地区の公立小学校で秋の運動会が開催される日と重なり、午後の部の参加者は55名となってしまいました。嶺井明子研究・実践委員会委員長と会場校の宇土泰寛校長の挨拶から、京都橘大学井ノ口貴史先生の司会の下、研究協議会が開催されました。

**第1部 授業研究**

## ①梶山女学園大学附属小学校の実践

（川野幸彦+授業者 梶山小学校）

地球的課題「水と生活」を基盤としたユネスコスクールとしての取り組み

## ②名古屋市立愛知小学校の実践

（林敏博 蓬来小学校）

多文化共生を基盤としたユネスコスクールとしての取り組み

## ③研究協議

## ④助言とまとめ （大津和子 北海道教育大学）

**第2部 研究・実践委員会からの提起**

## ①特定課題研究プロジェクトの研究成果振り返り

（杉田かおり 筑波大学）

## ②実践委員会の成果の振り返り

（山西優二 早稲田大学）

## ③理論と実践の統合、実践を臨床的に研究する理論の構築

（渡部淳 日本大学）

第1部では、「水と生活」という地球的課題へ取り組んでいる梶山小学校の今までの研究の経過の発表と多文化共生という地域や学校が抱える課題に取り組んでいる愛知小学校の実践が発表されました。両校とも、ユネスコスクールであり、ESDへの視点を持ちながら、研究実践を行っている。これらの視点からの質疑を行い、「我が事としての学び」、「社会変容は自己変容から生まれる」、「何よりも教師が元気になって教師が変わる」など、様々な助言をいただくことができました。

第2部では、まず6つの特定課題研究プロジェクト（2006年～2013年）の研究成果と特定課題以前の研究成果と課題を、国際理解教育の概念の明確化、ユネスコの動向と日本国内の動向の接近／乖離、グローバル市民の育成と国民形成の関係、実践の多様化をとらえる視点から整理した発表がありました。

次に、今までの公開実践研究会に基づいた実践委員会の成果と振り返りがなされました。また、感性的アプローチの意義を踏まえた今後の課題も提起されました。

最後に、理論と実践の統合、実践を臨床的に研究する理論の構築について、国際理解教育実践の展開を踏まえ、学習ツールとしてのアクティビティ、獲得型学習モデルなどの学び方への注目、実践者による実践研究、臨床的研究の

進展についてのプレゼンテーションがあり、たいへん有意義な公開研究会となりました。

その後、短時間ではありましたが、茶話会を設け、名古屋地区の先生方にも有意義な会になりました。

### 【第1回公開研究会参加記】

名古屋市立蓬来小学校校長 林 敏博

2014年11月に、持続可能な開発のための教育（E S D）に関するユネスコ世界会議が愛知県・名古屋市で開催されるにあたり、愛知県では、多くの学校がユネスコスクールに加盟し、E S Dの実践に取り組んでいます。その中の一つ、私立椋山女学園大学附属小学校では、『水と生活』という共通テーマのもと、日本、オーストラリア、ブルキナファソ、フランスと4大陸の大陸間交流プロジェクトを組み、グローバル 이슈を基盤にした実践に取り組んでいます。今回、第1回公開研究会に合わせて、午前中に全教員によって公開授業が行われました。どの授業も指導案の中にE S Dの視点が明確にされており、学習活動の中には様々な出来事を我が事として認識させるような工夫と協同的な学びが取り入れられていて、ダイナミックでリズムのある授業の構成は、E S Dの視点を生かした活動例としてとても参考になりました。そして、ホールスクールアプローチとしてのユネスコスクールの取り組みが、子どもの変容と、教師の変容につながる新たな学びの創造につながっていることを実感しました。

午後に行われた授業研究会の中では、私が昨年度まで勤務していた名古屋市立愛知小学校の多文化共生を基盤にしたユネスコスクールとしての取り組みについても発表する機会をいただきました。外国人児童が多く在籍する学校の特色を活かし、互いのよさを認め合い、尊重し合い、共に高め合う子どもの育成を目指した取り組みについて、参加者の先生方からは、この実践のどこがE S Dといえるのかを明確にすべきであるという点、また、文化理解と共生をどう結びつけていくのかという点について曖昧であるという指摘をいただき、自分の物語を創作させながら、ニューカマーの子どもと日本人児童との共生に取り組まれた事例についても紹介していただきました。

総括として、E S Dでは子どもの自己変容を社会変容へとつなげることが必要であり、そのためには我が事としての認識にとどまらず、社会をより良く変容させるために自己の変容を促すことが大切であるという指摘がありました。公開研究会に参加して、参加者の先生方より多くの示

唆に富むアドバイスをいただき、大変有意義な一日となりましたことに深く感謝申し上げます。

### 【第1回公開研究会参加記】

椋山女学園大学附属小学校教諭 川野 幸彦

「私たちの取り組みは、客観的にみても持続発展的な教育活動といえるのだろうか？」その疑問の解決に向けて、各先生方から多くのご助言をいただきました。

まず、椋小E S D（持続可能な開発のための教育）研究について「椋小ホールスクールアプローチ」（全校体制型のアプローチ）や、その中心テーマである「水と生活」を設定したことについては、地球的規模の課題（テーマ）とも重なるところが多いため、引き続き取り組むべきだということを示唆していただきました。また、その手法となっている「協同的な学び合い」についても検討していただきました。子どもたちの学習を持続発展させていくためには、一斉形態の知識伝達型授業ではなく、協同的な思考型授業形態をとっていくことは有効だということも支持していただきました。さらに、各教科にE S Dを溶かしこんでいくという本校の教材開発に対する考え方や、国際コミュニケーションの力を高めていくために行っている「毎日英語」などの本校の取り組みに対しては、子どもたちの身近な学習はもちろん、たとえその学習事象が遠い異国のことであったり抽象的な概念の世界であろうとも「我が事として学ぶ」ことができているのではないかと好評をいただきました。全般的に、E S Dになっているという評価をいただきました。

しかし、手法的には問題はないものの、教材の開発や子どもたちが実践をしていくための具体的な方法については、さらに研究の必要があるということをご指摘いただきました。その後、理論と現場での実践についても講義していただき、教員の意識もさらに高まりました。その結果、毎月行われる校内研修会においても、教員一人一人の実践をさらに持続発展させていくための検討を、以前にもましてE S Dの視点を持って行うことができるようになりました。そして、次年度には、愛知県で開催される国連のE S Dに関するユネスコ世界会議に合わせて、研究発表会を開くことになりました。



## 理事会・常任理事会報告

事務局

2013年度臨時常任理事会が、2013年9月28日（土）に、名古屋市の椋山女学園大学附属小学校において開催された。研究・実践委員会の公開研究会の後開催された同会には、常任理事5名が出席し、特定課題研究のテーマと学会誌の特集について審議を行った。「特定課題研究＝特集テーマ⇒紀要掲載」という前提を廃止し、学会誌の特集テーマは、編集委員会が決定し、編集する責任を負うこととなった。そして決定に際しては、常任理事会において事前協議することとし、特定課題研究は、研究・実践委員会が担うこととなった。また、『グローバル時代の国際理解教育』（明石書店）の続編について議論がなされ、編集は常任理事会メンバーが行うこととし、学会創設25周年（2015年）記念として2016年の出版を目指すこととなった。その他、国際委員会より、レジエンス（しなやかな強さ）を学ぶスリランカ・ESDスタディツアー（8月4日～12日）が無事終了したとの報告があった。

第2回理事会は、12月22日（日）に中央大学駿河台記念館において開催された。理事15名が出席し、オブザー

バーとして北京師範大学国際・比較教育研究所の姜英敏氏が同席された。ホームページの改善、公文国際奨学財団・かめのり財団への申請などについて審議された。また、2013年度研究大会（於広島経済大学）についての報告や、各委員会・事業からの報告が行われるとともに、次年度研究大会の進捗状況や韓国国際理解教育学会への参加にかかわる報告もなされた。

第3回常任理事会は、2014年3月22日（土）に文化学園大学新都心キャンパスにおいて開催され、常任理事6名が出席した。各委員会からの報告（各委員会報告参照）に加え、次年度大会の進捗状況についての報告がなされた。また、学会からの発信の多様化をめざし、フェイスブックの仮サイトの立ち上げがなされたことについても発言があった。さらに、学会編集新刊本については、公文国際奨学財団からの助成が受けられることになった旨、報告され、内容構成や執筆者及び編集日程等について審議された。書名は『国際理解教育ハンドブック』（仮題）にすることが確認された。

## 第14回 韓国国際理解教育学会参加報告

北九州工業高等専門学校 荒川 裕紀

### 大会概要

韓国国際理解教育学会第14回大会は、ユネスコアジア太平洋国際理解教育院（APCEIU）との共催、全北大学校の後援で、2013年11月9日10日の2日間開催された。場所は、「食の都」全羅北道全州市であり、今回の大会のテーマは「Post-MDGsと国際理解教育」であった。

大会の流れは次のとおりである。

（1日目）於：全北大学校人文大学（人文学部）

- 9:30-10:00 登録受付
- 10:00-10:30 開会挨拶
- 10:30-12:30 国際理解教育シンポジウム
- 12:30-14:00 昼食
- 14:00-17:00 自由発表

（2日目）於：全北大学校人文大学

9:00-11:00 ワークショップ「お米、アジアの文化多様性」

今回は首都ソウルから高速バスで4時間ほどの場所であったが、ソウルから、釜山から、そして地元全羅道からの様々な会員の方々が参加されていた。日本国際理解教育学会からは、藤原孝章会長をはじめ6名の会員が参加をし、韓国国際理解教育学会からの熱烈なる歓迎を受けた。以下に大会の詳細の報告を行いたい。

### 1日目のシンポジウム・自由研究発表

1日目は、まず江原大学校のハン・ゴンス先生の開会の挨拶ののち、大会テーマである「Post-MDGsと国際理解教育」に関してのシンポジウムへと移行した。国連のミ



レニウム開発目標が2015年に終了するのをきっかけに、現在これに対する評価と新たな課題形成のための様々な議論が活発に展開されている。韓国国際理解教育学会では新たな開発協力で出来上がった構図の中で、教育の役割と意味を確立するためには、開発目標の中での教育の役割と貢献について改めて考察し、新たな展望を提示する必要があると考えられた。そのため今回の大会では開発協力のパラダイムから国際理解教育の展望を議論することとなったのである。

シンポジウムでは、ソウルにあるユネスコアジア太平洋教育院のオム先生、慶熙大学のクァク先生、延世大学のパク先生、そして本学会の藤原会長が発表を行われた。具体的な発表テーマとしては「アジア太平洋における世界市民教育」「Post-MDGsと国際開発協力戦略」「Post-MDGs時代のグローバル市民概念化とグローバル市民教育について」「日本でのPost-MDGsの論議と国際理解教育」であった。国際理解教育、国際開発、グローバル教育の日韓の専門家の最前線の話が多く、聞き入る各会員を魅了した。

その後、討論者とフロアからの質問となったが、日本でも問題化している「世界市民教育をナショナルな次元の教育に還元することで、その意味が（国によって）変わるのではないか」「国際連合がどこまで国家の教育に介入が出来るのか」「南南協力のメリットとデメリット」などについて多く話された。国際理解教育の目的が、世界市民の涵養と同時に「開発と世界戦略」という側面もあるということに対して発表者、質問者の双方とも理解が進んでいると感じた。また藤原会長の「日本の学校教育ではPost-MDGsは語られず、ESDの方がよく採りあげられている」の主張には、驚きをもって受け入れられた。同じ「国際理解」を語っているが、国によって視点が異なる。複眼的な視点を持つということにおいてこのシンポジウム、その後

の自由発表・ワークショップは有意義であった。

自由発表では、1から6までの分科会に分かれての発表となり、私が参加、発表した「国際理解教育と国際教育協力」では、実践的な内容が多く、発表には力がこもっていた。日本からの発表者は中山京子会員と私で、ともにスタディツアーに関するものであり、スタディツアーの用語自体が新鮮であったようで、多くの質問が挙がった。

## 2日目のシンポジウム

2日目のプログラムにおいては、「お米、アジアの文化多様性」をテーマにワークショップが行われた。まず全北大学のイ先生が「お米とアジアの文化多様性」の題で基調講演を行い、その後、日韓の（チャ先生、織田雪江会員）米に関する実践授業（日中韓のお米をテーマとした授業、米を媒介とした日韓近代史）の発表が行われた。織田会員の発表は、開催地となった全羅道と日本の関わりも示すものであり、参加者も興味を持って日本の事例の紹介に耳を傾けていた。



## 感謝—更なる両学会の発展を祈念して—

毎年、学会のご厚意で訪問させていただいているが、今回はほとんどの韓国の会員の方々も遠路はるばる参加しているにも関わらず、暖かい気持ちで、我々を迎えてくださった。この紙面を借りて感謝申し上げたい。ホスト校の全北大学の先生方（イム先生、イ先生）にも本当にお世話になった。ここでの力強いつながり、議論はまさに国際理解の実践である。お互いの国での国際理解教育に関するアプローチ、言説、実践研究を実際に見聞きすることでお互いが刺激し、自らの現場へと持ち帰る。この経験は、得がたい大切な機会である。

この両学会の素晴らしい関係が永続的に続き、更なる太い絆で結ばれていくことを大いに期待している。



## 博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんなのご案内

国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。

- ・日時：2014年8月5日（火）10:20～17:00（受付10:00～）
- ・場所：国立民族学博物館 講堂およびセミナー室（2階）、本館展示場内
- ・参加無料／要事前申込 [当日参加可]
- ・問い合わせ先 knakayam@main.teikyo-u.ac.jp

## 新刊のご案内

日本国際理解教育学会・ユネスコアジア文化センター（ACCU）企画  
 大津和子編『日韓中での国際理解教育』（明石書店）

本書は、2007年にユネスコアジア文化センターの助成で開催した「日韓中三カ国相互理解のための教材開発ワークショップ」に端を発し、2009年度～2011年度科学研究費補助金（基盤研究B）を受けた「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発」の研究成果をもとに編集されたものです。「食文化—ラーメン・コメ」「人間関係—家族関係」「人の移動—移民」「人の移動—旅行」の単元開発と実践を通して日韓中の相互理解をめざした研究成果です。



## 事務局通信

### 寄贈図書

- 永添祥多『高等学校の日本文化理解教育』風間書房、2009年
- 永添祥多『日本文化理解教育の目的と可能性—小・中学校の事例を中心として—』風間書房、2011年
- 永添祥多『地域を創る日本文化理解教育』風間書房、2013年
- 竹田美和『グローバル化と子どもの社会化—帰国子女・ダブルスの国際移動と多文化共生—』学文社、2013年
- 文部科学省『国際理解教育実践事例集（小学校編）』教育出版、2013年
- 日本国際教育学会『国際教育』編集委員会編『国際教育』19号、学事出版、2013年
- 一般社団法人日本外国語教育推進機構『複言語・多言語教育研究』創刊号、2013年
- 和井田清司・牛志奎・申智媛・林明煌編『東アジアの学校教育』三恵社、2014年

### ◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様に関わられました図書、報告書、教材などがございましたら学会に御寄贈下さい。

### 新入会員

以下の16名が2014年5月15日までに入会を承認されました。

氏名	所属	氏名	所属	氏名	所属
西原 明希	北星学園大学	和泉元千春	奈良教育大学	友永 雄吾	国立民族学博物館
徐 希寧	大谷中学校・高等学校	林 香織	札幌北斗高等学校	杉本 孝美	同志社女子大学大学院
呉屋 淳子	国立民族学博物館	佐藤 貢	江別市立江別第三中学	森下 佳南	愛知淑徳大学
今野 誠志	鳴門教育大学	林 綾	奈良教育大学附属小学校	坪井 龍太	東洋英和女学院大学
木戸 啓絵	青山学院大学大学院	鄒 聖傑	中央大学大学院	リー・ステイブツ	同志社大学
				渋谷 真樹	奈良教育大学

事務局からの連絡とお願い

◆年会費納入のお願い

2014年度の年会費納入をお願いする時期になりました。同封の「払込取扱票」にて納入をお願い致します。会費を納入された方には、6月の大会時に紀要20号をお渡しする予定です。大会当日の事務局運営をスムーズに進めるためにも、できるだけ速やかな年会費の納入をお願いいたします。

- 正会員8,000円 学生会員4,000円 団体会員30,000円
- 振込先 (ゆうちょ銀行以外からの振り込みには店名、店番が必要となります)  
 ゆうちょ銀行から：記号00120-5、番号601555、加入者名 日本国際理解教育学会  
 他の金融機関から：店名〇一九 (ゼロイチキュウ)、店番019、預金種目 当座預金、  
 口座番号 0601555、加入者名 日本国際理解教育学会

◆住所・所属等変更連絡のお願い

異動の季節です。ご所属、ご住所などに変更がありましたら、事務局までE-mail (jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp) にてご連絡いただきたくお願いいたします。

◆紀要『日本国際理解教育学会』バックナンバーの購入手続きについて

明石書店から発行されております16号、17号、18号、19号につきましては、お近くの書店にてご購入が可能です。それ以前の紀要につきましては、事務局にて販売致しております。在庫希少で販売できない号もございますが、ご購入をご希望の方はお気軽に事務局までお問い合わせください。会員価格でご購入いただけます。

◆フェイスブックのご案内

学会からの発信ツールとして、これまでのホームページ (<http://www.kokusairikai.com/>) に加え、あらたにフェイスブックを活用することとなりました(日本国際理解教育学会で検索)。ご興味のある方は、是非フォローしてみてください。

2013-15年度 日本国際理解教育学会 役員・委員・事務局・各委員会・事業分担

【役員】

会長	藤原 孝章	
副会長	中山 京子	森茂 岳雄
常任理事	大津 和子 (北海道教育大学) 中山 京子 (帝京大学) 嶺井 明子 (筑波大学)	永田 佳之 (聖心女子大学) 藤原 孝章 (同志社女子大学) 森茂 岳雄 (中央大学)
理事	伊井直比呂 (大阪府立大学) 井ノ口貴史 (京都橘大学) 宇土 泰寛 (岡山女子大学) 桐谷 正信 (埼玉大学) 田淵五十生 (福山市立大学) 森田 真樹 (立命館大学) 吉村 雅仁 (奈良教育大学)	石森 広美 (宮城県仙台二華高等学校) 今田 晃一 (文教大学) 釜田 聡 (上越教育大学) 栗山 丈弘 (文化学園大学) 成田喜一郎 (東京学芸大学) 山西 優二 (早稲田大学) 渡部 淳 (日本大学)
監事	田尻 信壹 (目白大学)	松尾 知明 (国立教育政策研究所)

【顧問】

	米田 伸次	多田 孝志
--	-------	-------

【事務局】

事務局長	森茂 岳雄	事務局次長	福山 文子(中央大学)
ホームページ	今田 晃一	ニュースレター	栗山 丈弘

【委員会・各種事業】 ◎は委員長 ○は副委員長

研究・実践委員会	◎嶺井 明子 ○大津 和子 井ノ口貴史 宇土 泰寛 山西 優二 渡部 淳 杉田かおり(筑波大学大学院) 林 敏弘(名古屋市立蓬来小学校)
紀要編集委員会	◎中山 京子 ○桐谷 正信 石森 広美 今田 晃一 成田喜一郎 松尾 知明 森田 真樹
国際委員会	◎永田 佳之 ○釜田 聡 伊井直比呂 田淵五十生 丸山 英樹 吉村 雅仁 市瀬 智紀(宮城教育大学) 姜 英敏(北京師範大学) 南 美佐江(奈良女子大学附属中等教育学校)
民博事業	◎中山 京子 ○森茂 岳雄 居城 勝彦(東京学芸大学附属世田谷小学校) 織田 雪江(同志社中学校・高等学校)
出版事業	常任理事

編 集 後 記

会報の発行が遅くなりお詫び申し上げます。本号の編集は、諸般の事情で事務局ともども藤原が代行いたしました。応急のことで不備もあろうかと思っておりますがご容赦ください。奈良の研究大会でみなさまにお会いできることを楽しみにしております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

藤原 孝章